

NPO法人 こえとことばとこころの部屋

上田 假奈代 | うえだ かなよ

大阪府大阪市西成区

—『「こえとことばとこころの部屋』が
生まれたきっかけ—

上田：『こえとことばとこころの部屋』（以下、ココルーム）は、アートのNPOなのです。若者支援や就労支援、あるいはホームレス支援の団体に思われることがあります。人によって全然見え方が違



山出：上田さんは詩業家という肩書きを持つていますが、「ココルーム」の活動を始めたきっかけは？

上田：私は学生時代から20代にかけて、京都で詩作や朗読ワーキングショップを継続的に行っていました。学校を卒業しても仕事をしながらしぶとく続けていたのですが、一度詩とは全く関係のない生活をしようと、吉野の山奥の温泉旅館に住み込みました。人間よりも野生の鹿や猿が多い場所にいると、これまで自分がどれだけたくさんの人と話をしていた

注1 釜ヶ崎

日本高度成長期を支えるために安価で雇える肉体労働者の集まる「簡易宿泊所街」として作られた街。今も住んでいる人の多くは日雇い労働者や元労働者。地図上には実在しない同地区的通称であり、「一般的には『あいりん』と呼ばれている。（釜ヶ崎アーツガイドマップ）2017年）

うことです。一言で紹介するときは「出会いと表現の場所」と言っています。偶然の「出会い」と、個人と他者との応答を循環させながらできる「表現」。それらが起てる「場所」を大阪市西成区の通称・釜ヶ崎^{注1}に喫茶店のふりをしながら開いています。



©wakahara mizugaki

のか気がついたんです。それから職場の人には、故郷の話や子どもの頃の話など、彼ら自身に関する質問を始めました。答える彼らの表情が柔らかく変化する。続けるうちに、私は他者と向き合ったときの「声」を聞くことが好きだと気がつきました。その後、詩業家として活動を始めようと思ったとき、現代文学の担当者として、大阪市の現代芸術拠点形成事業のメンバーにならないかと市から声がかかりました。拠点となつた浪速区の巨大娯楽施設『新世界フェスティバルゲート』^{注2}の空き店舗のなかの一室。100名ほど収容できる広いスペースです。水光熱費や家賃は行政負担、つまり税金です。単にアート好きな人が集まる場を作るのはなく、より公共性を高めるため誰にでも開かれた場にしようと喫茶店のふりを始めました。それが『ココルーム』の出発点です。

注2 新世界フェスティバルゲート

1997年に大阪市浪速区にオープンした、大型遊具や娯楽施設を合体させた複合娯楽施設。2002年には大阪市の『新世界アーツパーク事業』の拠点として芸術系NPOが集まり、さまざまな分野のアートイベントが行われた。2007年閉業。

山出：垣根もなくいろんな人たちが集まる『新世界フェスティバルゲート』で、どんな人が訪れていたんですか？

上田：私が京都の短大を卒業した当時はフリーター全盛期でしたが、もう終わっていた時期でした。表現を仕事にするなら東京に行くしか選択肢がないほど狭き門。表現の仕事をしたくても実現できない若者たちは、孤立して鬱病になつたりします。私も他人事ではありません。大阪で表現を仕事にしたいと希望している若者たちに声をかけ一緒に働くことにしました。お給料が安くても生きるために、スタッフとお客様がテーブルを囲み、昼と夜のまかないご飯と一緒に食べます。「どこから来たんだですか？」最近の関心事は？」と、お客様に関心を持つて話しかけると、ぽつりぽつりと喋ってくれるんです。生き方や人づきあいの悩み、そんな苦勞が多い人もたくさんいるんですね。彼らのようなら若者的心をほぐせるようなワークショップやトークイベントを企画しました。それが『就労支援カフェ ココルーム』事業です。



©yano daisuke

山出：釜ヶ崎は呼ばれて来たわけではなかったですね。『新世界フェスティバルゲート』周辺では、ホームレスの人たちが大量のアルミ缶を積んだ自転車をこぎダンボールを積んだりヤカーを引いていました。1999年から2000年にかけて、大阪で野宿の人が一番多い時期で、釜ヶ崎でも1000人を超えていたそうです。けれど市民やアート業界の人はその話題には全く触れず、むしろホームレスがタブーとされているように感じました。私は彼らの「声」を聞きたいと思ったんです。2004年、ホームレス状態の人が路上で売る雑誌『ビッグダイシェー』の創刊を知り、雑誌が売れるようとにイベントを企画したんです。1回目には、賛同するアーティストと販売員さんに来てもらいました。そして2回目「ホームレスの人に舞台へ上がって表現してほしい」と思つたんです。私が釜ヶ崎に足を運ぶと、リヤカーを引きながらハーモニカを吹いているおじさんを見かけました。大勢のホームレスの人がいるんだから、なかには芸術や表現が好きな人もいるのではないかと思つたんです。それを声に出してたら本当に元ピアニストに出会い、出演交渉をしたら「生きる理由ができました」って言つ

てくれました。詩人のホームレスの人には最初は断られたんですが、メールのやりとりが始まり稽古に立ち会い、最後は舞台でパフォーマンスに挑戦してくれました。彼らとの出会いは大きかったです。そして、拠点を新世界から移さなくてはならなくなり、2008年に釜ヶ崎の商店街に移り喫茶店を始めました。

同じ大阪市内でも釜ヶ崎は市民にとって精神的な距離があり、拠点を移すと途端に客足が遠のきました。それで、思い立って詩人の谷川俊太郎さんに「来てください」と手紙を書いたこともあります。すると電話がかかってきて、「僕は言葉の力なんて信じてないの。お金の力を信じてる。だからあなたにお金をあげたい」って言われました。でも「谷川さんが釜ヶ崎に来てください」と改めてお願いしました。谷川さんは2009年11月に来てくださいって、釜ヶ崎を題材としたすばらしい詩を作ってくれました。

山出：「釜ヶ崎芸術大学」が始まるのはその時期でしょうか？

上田：もう少しあとです。2011年にすると商店街の喧騒がなくなつていきました。これは釜ヶ崎に暮らすおじさんたちの急速な高齢化です。最近見ないと思っていたおじさんが亡くなつてしたり、入院していたり。喫茶店で待つているだけではだめだと思い、街に出て行き、月に1回のペースで9ヶ月間、おじさんたちが多く集まつている場所のそばでワークショップを行いました。全ての講座に参加してくれた断酒中のおじさんは、「酒を止めるのはね、抗酒剤で止めるんじゃない。人生の楽しみで止めるや」と話してくれました。周りのおじさんは生活保護で暮らせるけれど、单身でやることもない。飲酒やギャンブルでまぎらわしているんです。そんなおじさんは「月に1回が遠い」と言うんです。私たちにとっては、1ヶ月なんて矢のように通り過ぎるけど、おじさんは「来月、生きているかわからん」と言うんですよ。だったら、もう少し集中的に場を作ろうということで、スタッフの発案で2012年に『釜ヶ崎芸術大学』とい

う名前で出張講座や公演を始めました。暴動の歴史もある『釜ヶ崎』の地名を活動名にすることは政治的かもしれません。街にはそれを嫌がる人もいます

が、私は『釜ヶ崎』を虜めながらも困難な状況をどう生き抜くかという知恵やたくましさ、ユーモアを持つ地名として、次の世代に繋いでいきたいという思いを込めて名乗っています。

山出：障がいのある方やホームレスの表現は「困難な状況で表現をして胸が打たれる」と無防備に言われることが多いですが、それは周縁の芸術として捉えられており、からだと思うんです。でも、それが周縁かどうかは見る人の立ち位置によって変わりますよね。

上田：アーティストだろうとホームレスだろうと障がいのある人だろうと、舞台上での立場は変わりません。『釜ヶ崎芸術大学』は困難な状況にある人を支援する活動なのではなく、1人ひとりに向き合うことを軸としています。

山出：『ココルーム』は日常的に変化し続



仕事を退職してから独学で創作活動を始めたという富永さん(通称:からくり博士)の作品『夫婦坂』。飲み終えたビールの空き缶と100円ショップで購入できる手近な材料でからくり作品を作つては『ココルーム』へ持つくるという富永さんは、「孤独に勝てる人間はおらんのや」と真理を打つ格言を言う。

上田..自分がどうしたらいいか、どこに
山出..『ココルーム』は目的を見失つた人
たちが出会う場所とも言えるのかもし
れませんね。とりあえずここに来たら寄
り添つてくれると思わせるような安心
感があります。

上田..自分がどうしたらいいか、どこに
山出..『ココルーム』は目的を見失つた人
たちが出会う場所とも言えるのかもし
れませんね。とりあえずここに来たら寄
り添つてくれると思わせるような安心
感があります。

らないなんてもつたないと思います。

「喫茶店のふり」 人が出会い系、交差する場へ――

上田..少し前に「部屋を探してほしい」と
若者から電話がかかってきたんです。よく
聞くと、大分の家を追い出されたから
釜ヶ崎に来たと言っています。釜ヶ崎で生
活する気はあるのかと聞くと「ある」と言
うので、福祉の相談員と連絡をとりなが
ら物件を探してアパートに連れて行きました。
結局は親族が面倒を見るというこ
とになり、数日後に彼は帰つたのですが、
彼は釜ヶ崎がどういう場所かは知識とし
て持つていて、3日間野宿しているとき
にスマートフォンで検索したら『ココ
ルーム』がヒットしたから電話をしたと
言っています。福祉の支援をしているわけ
じやないのに、不思議な縁でした。

山出..これから活動はどこに向かっ
ていきますか?

上田..出会いと表現の場として、ゆるや
かに増殖したいです。『ココルーム』は2
016年に釜ヶ崎の3階建ての物件に
引っ越しました。誰でも立ち寄ることの
できるカフェと庭。そしてより多様な出
会いがあることを願い、36ベッドのゲス
トハウスの運営を始めました。

釜ヶ崎は残り5年でおじさんたちの多く
が死んでしまい、その代わりにホテル
が建ち並び、釜ヶ崎 자체が解体されて分
散していくのだと思います。『ココルー
ム』は、釜ヶ崎の抑圧や困難のなかで、
ある種の弾かれた周縁の人たちの生き
る知恵やユーモアが次の社会への架け
橋となるという確信のもと、ここでどれ

に行けばいいかわかったら解決するけど、
その手前がわからない。この若者に対し
てここのおじさんたちは「釜ヶ崎まで來
れたんやから、もう大丈夫や」と言つて
くれる。「またあかんかつたら、こっち
に来たらええやん」「行くとこある方が
頑張れるやろ」と、背中を押してくれた
ります。

山出..これから活動はどこに向かっ
ていきますか?

上田..出会いと表現の場として、ゆるや
かに増殖したいです。『ココルーム』は2
016年に釜ヶ崎の3階建ての物件に
引っ越しました。誰でも立ち寄ることの
できるカフェと庭。そしてより多様な出
会いがあることを願い、36ベッドのゲス
トハウスの運営を始めました。



山出..今でも『ココルーム』には頻繁に
おじさんたちが出入りしているんですね
か?

上田..街自体の高齢化が進んでいるの
で、自由に外を出歩けない人が多いんで
す。今も『ココルーム』は、高齢になっ
て、さらに鬱病や認知症を発症した方た
ちと、若者や旅人がこの場所に集まり、
どう共存していくかという課題を持つ
ています。釜ヶ崎に拠点を移してから、
精神や知的にボーダーがあるように見
えるけれど障がい者手帳を持つていな

だけ多様な人に出会えるが、どれだけの
ものを渡せるかということに注力しま
す。これまで3回場所を移動してしま
たが、15年間の活動を振り返ると私たち
は出会いと表現の場所である「喫茶店の
ふり」を諦めなかつたのだと思います。
この場での対話や直感から、次の事業展
開を考えてきたので、これからもそうす
ると思います。

上田..街自体の高齢化が進んでいるの
で、自由に外を出歩けない人が多いんで
す。今も『ココルーム』は、高齢になっ
て、さらに鬱病や認知症を発症した方た
ちと、若者や旅人がこの場所に集まり、
どう共存していくかという課題を持つ
ています。釜ヶ崎に拠点を移してから、
精神や知的にボーダーがあるように見
えるけれど障がい者手帳を持つていな
い人によく出会うようになりました。孤
独感に苛まれたとき、統合失調症のきさ
しが言動や思考に現れてしまうことは
誰にでも起ります。なのに、障がい者手帳を
持っているかどうかで判断されている
のではないかと感じるんです。本来なら
ケアできるはずの専門職の人が気づけ
ないところが「できないあなたが悪い
んだ」と言われて周縁に置かれる状況に
気持ち悪さを感じます。

お金がなくて実現していないのですが、
刑務所から「いつか所内でやりたい」と
依頼されたこともあります。日本の刑務
所でも単なる1人作業だけではなく、演
劇のようなグループワークの取り組み
がされてもいいと思うんです。海外だつ
たら、刑務所の人たちが制作した演劇を
施設の外で上演して、入場料を集め、上
演し、そして街で打ち上げして刑務所へ
帰るというような実践もあります。今
ところ日本では考えられない。出所する
前に持つべき社会との接続点がないまま
出所しなくてはなりません。最も表現か
ら遠い人が、心の奥からの表現をしたと
きに最も面白いということを、人々が知